**平和統一運動次世代リーダー育成のための**

**「私から始まる平和統一大賞」青年スピーチ部門及びエッセイ応募原稿フォーマット**

**■「私から始まる平和統一大賞」とは**

　朝鮮戦争によって分断された朝鮮半島と在日コリアン。先人たちが夢にまで見た「統一」はいつ来るのでしょうか？　最近の国家情勢で考えると問題があまりにも大きく見えて、何から手を付けて良いのか、わからなくなってしまうことはありませんか。しかし、皆さんが「心の壁」を乗り越えた小さな体験が、何かしら在日同胞の和合に役に立った事はなかったでしょうか？

　’為に生きる’神様主義の真の愛を根本精神として国籍と思想、組織を超越して、国内外の韓民族の和合と統一の実現を目指す平和統一聯合は、この度、皆様の「心の壁」を乗り越えた経験を、同世代や後に続いていく世代の力とするために、創設20周年記念企画としてこの賞を創設いたしました。

|  |  |
| --- | --- |
| 名称 | 「私から始まる平和統一大賞」青年スピーチ部門、会員及び一般部門　エッセイ募集 |
| 募集テーマ | 「私の心の壁を越えて始まった平和統一の経験」・自分の置かれている環境でぶつかった「心の壁」、なぜそれが「壁」であったか、どのようにして乗り越えたか、そのきっかけや周りからの言葉、勉強になったと思う自分の経験、そしてそれが在日同胞の和合、朝鮮半島の平和統一にどのように発展していく可能性があるかをスピーチ、または記述。 |
| 応募条件 | 平和統一聯合に所属している会員、担当者。または左記から紹介を受けた方。 |
| 募集期間 | 青年スピーチ部門：2024年６月16日（日）まで地方予選会員及び一般部門　エッセイ募集：2024年４月１日（月）～2024年６月17日（月） |
| スピーチ原稿規程 | 【青年スピーチ部門】　５分以上７分以内（制限時間を超過した場合は減点）。※パワーポイント使用可。【会員及び一般部門　エッセイ募集】800字以上3000字以内、１人１点。※両部門とも主となる言語を日本語で行うこと。部分的に韓国・朝鮮語、または他国の言語を使用しても良いが、日本語の意味を付け加えること。 |
| 応募方法 | Wordファイルのまま、応募フォームよりご応募ください。※ 青年スピーチ部門に応募の方も、同様に原稿を提出してください。 郵送、FAXでのご応募はご遠慮いただいております。 |
| 発表 | 2024年6月下旬　ホームページにて公開入賞者には、メールまたはお電話にて直接ご連絡をさしあげます。青年スピーチ部門の大賞受賞者は、７月４日東京都内の記念行事でスピーチします。その交通費は本部負担。 |

**題名：**私から始まる　平和統一

**お名**前：　玉井真由美

(下記より本文をご記入ください)

「平和」の響きは心の安らぎ。平和統一がされた世界はどれほどすばらしいか。

なんの心配事もなく、安心して日々を暮らせる世界。お互いに気づかい合って、信頼できる仲間に家族、近所の人たち。とにかく身近な人間関係と生活環境が整っていて、世界中どこにいても安心できること。そんな世界が理想。

他人を傷つけたり、自分を傷つけることもない世界。身近な人を大切にして、日本人を大切にして、隣国を大切にして、日本の裏側に住んでいる人も大切にして。言語、宗教、肌の色も関係なく大切な人たち。

自分を大切にして、自分自身を傷つけることなく、困っている人がいたら助けてあげられるだけの心の余裕があること。

共存共栄の世界。

自然に癒しを求めるならば、自然をこれ以上破壊してはいけないし、持続可能な世界を目指さないといけない。日本には湯水のごとくという言葉があるけれど、世界を見たらどれほど贅沢な事か。そしてどれほど豊かな国か。この日本の地が。

万物を大切に扱い、大量生産、大量消費、大量廃棄を繰り返してもいけない。

未来の人達の未来を奪わないこと。先人の知恵の豊かさよ。現代人の傲慢さよ。

平和を願えば願うほど天の父母様の創造理想の理想の偉大さとそれを教えて下さる真のお父様と真のお母様の平和に対する思いがどれほど偉大か。そして、エゴの塊である今の人類が救われる道は、真のご父母様につながる道しかないとつくづくわかります。

でも、現実の自分はどうか。いつでも過去にとらわれるし、他人と自分を比較して、嫉妬もするし意地悪な思いもわくし、不公平と思うこともあるし、不満も出るし、傲慢だし、自分を傷つけ始めたらきりがない。

理想と現実のギャップをどう埋めるか。

平和って心の教育だと思う。環境は時間とともに整うけど、心の痛みを分かち合う理解しあう心の教育は家庭連合の真骨頂。どれほど心が豊かになるか。創設者である真のご父母様しか世界中どこを見渡しても後にも先にもお二人しか思い浮かばない。

そのような理想的な世界を思い描きつつその一助に私もなりたい。